

2022 年横浜ナザレン教会・待降節第三主日 (12/11) 礼拝

「悔い改めとは」

使徒言行録第九章 10 節から 19 節

【聖書】

使徒言行録 9: 10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を尋ねよ。今、彼は祈っている。12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕えるため、祭司長たちから権限を受けています。」15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、また、イスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。16 わたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示そう。」

17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼(バプテスマ)を受け、19 食事をして元気を取り戻した。

1 悔い改めの季節

今朝、私たちは、待降節第三主日礼拝を捧げています。待降節は、既に起こったクリスマスの出来事を思い返しつつ、必ずやって来るという真の王イエス・キリストを待つ思いを新たに作る季節だ、と先週、ご一緒に確認しました。では、真の王・イエスキリストを待つ心を新たに作る、とは、具体的にどういう事なのでしょう。

悔い改めて歩むことだ、と言われていています。あまり馴染はありませんが、待降節は、悔い改めの季節でもあるのです。悔い改め、と申しますと、私たち、「反省すること」とごっちゃにして、「悔い改めばかりでは暗くてやる気がなくなる」と考えてしまいがちです。私もかつてはそうでした。しかし、悔い改めと反省は根本的に違うのです。反省は自力で行うもの、神の介入はありません。ですが、悔い改めは、私たちの生き方に、キリストが介入してくださり、神の方へと向き直させてくださる、方向転換、喜びの出来事だ、と言われていています。何故、喜びなのでしょう。

ある説教者が、よく説教の中で語る事ですが、起こっている現象の表面だけを見ていても

真実は分からない、目に見えるものの奥に本質的なもの、本来の姿を見ようとしなければ、真実は理解できない。本当にその通りだと思います。

悔い改めとは、キリストによって神の方に方向転換させられる事ですが、方向転換し神を求めて歩むようになれば、物事の本質的なもの、本来の姿を見る目が開かれる、だから、喜びの出来事と呼ばれるのだと思います。そのことを、今日の聖書、サウロの回心物語は語っているのです。サウロの目から鱗のようなものが落ちた、というのはそういう事だと思います。

2 回心

さて、今週の週報の「黙想の手引き」は、イギリスの作家であり伝道師でもある C.S.ルイスの言葉、「すべての回心の物語とは、祝福された敗北の物語である」です。今日の聖書にこれ以上ピッタリの言葉はないと思い掲載しました。

サウロは、ダマスコの近くで、天からの光に打ち砕かれました。天から響いたキリストの言葉「私はあなたが迫害しているイエスである」という言葉にそれまでの自分が信じていたものが木っ端みじんに吹き飛ばされます。彼は、コテンパンにされて、地面に倒れ伏し、目が見えなくなります。キリストに敗北したのです。神に逆らう者達を縛りあげエルサレムに連行して殺すべく意気揚々とダマスコに向かっていたサウロ、しかし、天からの光に打たれて目が見えなくなった彼は、自力では一步も進めなくなり、手を引かれて、ダマスコに入ります。サウロが思い描いていたものとは何もかもが逆、人の目にはサウロはさぞ惨めな姿に映っていたでしょう。しかし、キリスト・イエスは、既にサウロを祝福する準備をなさっていたのです。

同行の人びとに手を引かれて入ったのは、「直線通り」と呼ばれる大通り沿いにあるユダという人の家でした。当時のダマスコは、国際都市、多くのユダヤ人が住んでおり、エルサレムとの行き来も盛んだったようです。ユダという人は、ユダヤ人コミュニティの名士であるとか、又はユダヤ人専用の宿屋の主人ではなかったか、とされています。詳しいことは分かりませんが、ユダヤ人の間では知られていた人のようです。

その家でサウロは三日間飲まず食わずであった、とルカは語ります。飲み食い出来ないほどに弱り果てていた、弱さのどん底まで落ちていた。サウロは、自分にも、自分が今まで信じて来たものにも頼ることはできません、頼るもの全てを失っていました。何も見えない暗闇の中、自問自答します。「自分はこれからどうなるのか、いや、それよりも、イエスは生きて天におられる、私は神からの救い主を迫害していたのだ！なんという事か」恐怖と不安に押しつぶされそうになる中、彼はキリストの言葉を思い出します、「**起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。**」「キリストは私に何か伝えようとしてされている」天からの光の中で確かに聞いたこの言葉に、彼はさすがのしかない。この言葉を杖とし寄りかかるようにして身を起こし、神を礼拝して祈ったのだと思います。何時間も祈り続けているとウトウトし夢を見ました。夢の中では、アナニアという人がやって来て、自分の頭の上に両手を置く、すると、なんと見えるようになった！びっくりして夢から覚めます。見えるようになった生々し

い感覚はあるのに、やはり自分を囲むのは暗闇ばかり。夢とは思えないリアルさに「神よ、この事が私の身に起こりますように、目が見えるようにしてください。」とサウロは祈り叫びます。

3 悔い改め

さて、キリスト・イエスは、今度はアナニアに現れます。アナニアは、主イエスを「我が主、我が神」と告白する信徒でありました。キリスト・イエスが「アナニア」と呼びかけると、すぐに声のぬしが主イエスだと分かり、「主よ、ここにおります」と答えます。そんなアナニアに、主は驚き怪しむことを命令されました。「立って行き、ユダの家にいるサウロという名の者を尋ねよ。今、彼は祈っている。アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」アナニアは納得できません。反論します。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕えるため、祭司長たちから権限を受けています。」「主よ、あんな危険な男を助けろ、というのですか？とても正気の沙汰とは思えません。どうかお考え直してください。」このように主イエスに対して、隠し事やいい恰好はせず、正直に自分の考えを申し述べるアナニア、主とよいお付き合いをしながら生活している人なのだなあ、こうありたいなあ、と思わされます。

主はアナニアを咎めることはしませんが、彼と議論もしません。再度、お命じになります。「行け。あの者は、異邦人や王たち、また、イスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」主イエスのご自身のサウロに対する計画の一部をアナニアに明らかにされます。「敵であるサウロを、私は自分の器として選んだ」と。

アナニアは、主イエスをキリストと信じ、祈りつつ、主に従って生きてきた人です。裏表なく、真実に主の弟子として生活してきた彼に悔い改めは必要ないようにも思えます。しかし、そうではない、とルカはこの物語で語っているのです。どんなに主イエスに従い、主の教えに生きている人でも、人間である以上、悔い改めは必要なことであり、それは恵みなのです。先ほど、冒頭で、「悔い改めとは、神さまの方へ方向転換し、物事の本質的なもの、本来の姿を見る目が開かれるということ」と申し上げました。この時のアナニアもまさにそうです。彼の言っていることは、人間の立場では尤もなこと、これ以上に正しい判断はないでしょう。しかし、神から、主キリストから見れば、事情は違います。サウロも又、神の独り子である主イエスが、人間の間に真の人として宿り、十字架によってその罪を贖った者です。これは、人間の地平に立って見えないこと、キリストの側に立たないと見えない現実です。しかも主は、サウロをご自身の名前を人々に伝える器として選ばれました。

何でもそうですが、立っている位置によって見える姿は全く異なります。飛行機から富士山を見下ろすと丸い火口が目に見え飛び込みますが、その姿は、東海道新幹線から見える雄大な富士山とはまるで違います。ですから、物事の見方を変えられる悔い改めとは、私たちが立っている場所、物事を見る場所が変えられる、とも言えるのです。私たちは、悔い改め

を通じて、主イエスの側に立って見ることを教えられるのではないのでしょうか。そうして、自分達の狭い物の見方から解放されるのです。今日のアナニアのように。

彼は、主イエスが見ているものを示されました。ですが、アナニアは、主の言葉を聴いて、すぐにサウロへの敵意や警戒心を手放せたわけではないでしょう。ただ、「主イエスがそこまでおっしゃるなら」と自分の思いを一旦脇に置いて、主の命令に従うことにし、出かけて行ったのではないかと思います。人間である私たちが主イエスに従うという時、「取敢えず従ってみる、すると、全く新しい発見をする」ということが度々起こる、そういうものではないでしょうか。

4 赦しの内に

アナニアは、直線通りのユダの家へとまっすぐに向かい、サウロをおとします。やつれた姿の若者が一人たたくむ部屋に案内されたアナニア、サウロと二人きりになると、祈りつつ、彼の上に手を置きます。その時、アナニアは不思議な経験をします、自分の中の別の存在が自分の口を通して語るのを聴いたのです。それは、私の想像です。が、しかし、あなたが間違いではない、と思います。自分達を捕まえて殺そうとしている敵を「兄弟」と呼びかけるのは、とてもアナニアの力とは考えられないからです。アナニアは、ユダの家に向かう道すがら、必死で主イエスに祈ったのだと思います。「主よ、あなたは使徒たちに次のように教えられたと聞いています。『最高法院や王の前に引き出されたら、何を言おうか、と前もって考えるな。必要な言葉はその場で聖霊が教えてくださる』今、私の内にはあの男に手を置いて語るべき言葉などありません。罵倒する言葉か冷たく突き放す言葉しかないのです。どうか、あなたの言葉を聖霊が語ってくださいますように。」そして、サウロを目の前にして、全てをキリストに、聖霊に委ねて手を置いたのです。すると、本当に不思議なことですが、「きょうだいサウル」彼の中には決してない言葉が口をついて出て来た。サウロも、アナニアに「きょうだい」と呼びかけられるなんて思いもしなかったので、吃驚したでしょう。が、アナニア自身もビックリしたはずです。

続いて言葉が自然に流れ出した。「あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」この言葉は、ご自身を殺し迫害するサウロを赦す愛の言葉、アナニアを通して、キリスト・イエスの敵を愛する愛の言葉がサウロに伝えられました。このキリスト・イエスの愛は、十字架の上で敵を赦した愛です。アナニアが赦しを宣言した時、敵を赦す愛の言葉を放った時、サウロは、キリストを、神を知ったのです。そうして彼の目から鱗のようなものが剥がれ落ち、目が見えるようになりました。つまり、真実の愛、敵を愛する真の愛に包まれ、この愛を経験してこそ、人は回心する、それが悔い改めです。私たちが考えるように、自力で頑張って神さまの方を向くのではなく、神の愛の中に、赦しの宣言が響く中に入れられた時、もっと言えば、主イエス・キリストの十字架のもとで主の愛に打たれて、私たち

は回心するのだと思います。

ですから、悔い改めによって私たち人間が連れて行かれるのは、キリスト・イエスの十字架のもと、と言ってよいのではないのでしょうか。主が十字架で息絶えた時、「真にこの人は神の子であった」と百人隊長が告白したあの十字架のもと、神の方に方向転換させられ、この十字架のもとに連れて行かれ、そこから世界を、人間を見て考えることを学ぶようになる、それが回心、悔い改め、と言ってよいのではないのでしょうか。

サウロは、主イエスの恵みの審きである十字架のもとに連れて来られました、そこで、神を信じているつもりで自分達が神となり、真の神を迫害し殺した真実に気づかされたのです。しかし、それにも拘らず、父なる御神とキリスト・イエスは赦し愛し生かしてくださる、初めて、自分の真実の姿、神に赦され愛され生かされている者であるのを知ったのです。

同じように、アナニアも変えられました。キリストの十字架のもとに連れて来られ、主の十字架からサウロ、自分の敵を見ることを学びました。「主はサウロの為にも命を捨てられたのだ」と。そうして、今までよりも一層、神の愛を、主キリスト・イエスを深く知る者と変えられたのです。キリストの十字架のもとで神を知ること、終わりはありません。私たちは、一生をかけて神を知って行くのだ、と今日のアナニアの物語は教えてくれているようです。

しかし、サウロやアナニアが立たされたのが主の十字架のもとであるからこそ、苦しみもできます。主がアナニアに「わたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしはサウロに示そう。」と預言したように、サウロのその後の人生は苦難の連続でした。ですが、苦しみ悩むことは悪いことではない、とパウロと呼ばれるようになったサウロは私たちに語りかけます。生きることに苦しみはつきものです。ですが、キリストに生きる苦しみであるなら、そこには必ず助けがあり、恵みがあり、祝福があり、喜びがあります。神を、キリストをもっともっと知る者となるのです。

5 悔い改めて戻る場所

さて、目が見えるようになったサウロは、洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した、とあります。この食事は聖餐ではないか、と言われています。つまり、サウロは、洗礼を受け、聖餐に与って、教会の一員となりました。悔い改める時、私たちは、独りよがりの信仰に戻って行くのではなく、信仰共同体に戻って行くのです。そうして、実際に信仰の仲間と共に歩みつつ、主イエスの教えに生きることを学びます。主イエス・キリストがそうしなさい、と仰っているからです。

だから、この世界の全ての者が神の愛を知り、神の愛のうちに生きる終わりの時は、既に神を求めて生きる信仰共同体の間では始まっています。神の独り子がこの世界に来てくださり、神の義なる愛を現わしてくださった時から、2000年前のクリスマスから始まっているのです。このことを覚えて、信仰の仲間と共に、主を待ち望みつつ主を求めて、祝福された悔い改めの物語を紡いでいきたい、心からそ

う願います。